
Grim Reaper - live

あると

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Grim Reaper - live

【Nコード】

N8752P

【作者名】

あると

【あらすじ】

瀕死の野良猫を抱え、少年は見つめた。

消え入りそうな声に気づく者はいない。
小さな姿の行く末に目を向ける人もない。
ひとつの命がなくなるうと、世界は何も変わらない。

柏木秀樹の手は汚れていた。

あたたかい血が冬の空気に触れて冷たくなってきた。膝の上の野良猫は、見かけよりも軽い。冬毛に生えかわっていたから、大きく見えたようだ。ふんわりとした毛並みはいま、身体に貼りついてしまっていた。ささえる秀樹の手のひらは、小動物の体温を近く感じとっていた。

ぬめる雫が靴の甲に赤い点を作る。

秀樹は歩道の脇の狭い花壇に腰掛けていた。道路からそこまで、野良猫を運んできたのだ。赤い線がガードレールをまたいでいた。
動物の事故。

以前なら、気にも止めなかった。車に引かれた動物なんて、すぐに記憶から消し去っていた。保健所にも連絡せず、汚いものを避けるように通りすぎていた。

そうしなくなつたのは、自分の異常性に気づいてからだだった。

秀樹の前を中年の男が通り過ぎる。彼の手の中に血塗れの猫がいると気づいて、気持ち悪いものを見たという顔で足早に遠ざかった。

その男の顔に、秀樹は二つの針を見ていた。
時計である。

物心付いたとき、秀樹には他人の顔にアナログ時計が見えていた。
長針と短針の刻みが見えるのである。

そのことを話したとき、両親は困ったように首を振り、友だちはおかしいヤツだと言った。それ以来、口を閉ざした。だが、見えなくなりしなかった。

膝の上の小動物にも時計があった。今にも止まりそうだった。それが、わかる。異臭が鼻につくようになっていた。死を、見つめる。

間もなく、この世から消えてなくなる存在を見つめた。時の刻みがゆっくりとなる。

停止するその時まで、小さな生命を見つめ続けた。

やがて、時計が最後の時を刻んだ。

重い。

この世に残った死の重みが感じられた。野良猫の死を知る人間は自分だけだった。通りすぎる人も、学校のクラスメイトも、世界中の誰も、知らない。

秀樹は猫を抱えて立ち上がった。彼に気づいた通行人が、気持ち悪いと言い捨てて唾を吐いた。悲鳴を上げて逃げ出した女もいた。

彼らは、いつか自分が死ぬ現実を知ろうとしない。死んだものに対して、嫌悪の感情しか抱かない。死にたくないから、死から遠ざかろうとするのだろう。

秀樹は猫を埋められる場所を探して歩いた。近くに公園があったことを思い出し、足を向けた。

公園には、ホームレスがいた。彼らは、一様にうるんな目を向けてきた。

秀樹は彼らの顔を直視して会釈した。そんなことをされたことがなかったのか、彼らは戸惑いながらも頭を下げた。

「どうした坊主」

ひどい臭いのする老人が声をかけてきた。

「お墓を作りたいんです」

黒くすすけた顔が汚かった。よれよれの衣服が黒ずんだ汁を吸っていた。靴は風通しが良さそうだった。

「くせえな」

老人は秀樹が抱えた野良猫を見た。秀樹は黙って目を落とした。

「こっちに来い。埋めてやる」

「え……はい」

秀樹は顔を上げて返事をした。老人は先に立って歩いた。林の奥へと向かっていった。ホームレスの男たちが多く目に付いた。

「あ」

少し開けたところに、人だかりがあった。錆びたスコップを持った男が何人かいた。

「一緒に埋めてやる」

近づいていくと、青白い顔の男が横たわっていた。その横の穴は、人間の大きさだった。

「止まってる」

「あ？」

老人は怪訝な顔をしたが、それだけだった。男たちが死体を穴に入れた。

「ほれ」

秀樹は促され、無惨な姿の猫を死体の側に置いた。

「ヤツは、猫が好きだったからよ。ちょうどよかったぜ」

「そうですか」

秀樹は彼らが埋められていく様を見守った。どこから引き抜いてきたのだろう、牡丹の花が添えられた。

「黙祷」

老人が低く呟くと、仲間たちが頭を下げた。秀樹もそれにならない、目をつぶった。名も知らないホームレスの男と、野良猫の安息を願った。

「ありがとうございます」

老人は何度か頷いて言った。

「手、洗っていけ。臭うぞ」

「はい」

冷たい水道水で手と、制服に付いた汚れを洗い流した。遠巻きに、家族連れやらカップルやらが、指を指していたが気にならなかった。
「帰れ」

老人はもう用は済んだとばかりに、秀樹を見もせず手を振った。

「ありがとうございます」

秀樹は頭を下げて、公園を後にした。

手の中に、まだ野良猫の感触が残っていた。臭いも落とし切れていない。だが、何日かすればなくなってしまうものだった。

秀樹はふと気づいた。

死とは、忘れてしまうことではないのか。

忘れなければ、生き続ける。記憶の中で、生き続ける。時間は止まっても、覚えている限り、消え去りはしない。

秀樹は振り返り、老人とその仲間のホームレスたちの姿を目に留めた。いくつもの時計の針が時を刻んでいた。

誰もが目を背け、いないこととして扱う彼らのことを忘れないようにしたい。ほんの少し触れあっただけの彼らも、こうしてそれぞれを生を生きているのだ。自分が消えてなくなるその時まで、無数の命を忘れない。

自分のことも、誰か覚えていてくれるだろうか。

その問いかけは、冬の空に溶けて消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8752p/>

Grim Reaper - live

2011年1月9日06時39分発行